

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

気づきの共有／二本松市立あだたら保育所（福島県）

子どもたちが生き物との関わりの過程で気づいたことを、どのように可視化したり共有したりしていますか？

今回は、オタマジャクシを飼育していた子どもたちが、変化に気づき、友達とその気づきを共有し、保育者や保護者の関わりによって、さらに対象への興味を深めていった事例です。

また、保育カンファレンスをこまめに行うことで、子どもの姿を共有し、子どもの内面理解を深めると共に、共通理解を基に環境の工夫につなげています。



● カエルの子どもになったんだね／5歳児

◆ 「A君すごい！いい考えだね！」（5月下旬）

5歳児の子どもたちが、生き物の世話をしている時に、オタマジャクシを1匹排水溝に流してしまった。その様子を見ていたAちゃんが突然大きな声で泣き出した。

Cちゃん：「オタマジャクシが流れたから……」

Dちゃん：「かわいそうだったんじゃない？」

保育者の心の声：Aちゃんの優しい所、みんな気づいてくれるといいな。

保育者：「そうだね……。どう思ったんだろうね」

Eちゃん：「助けてやりたかったのかな……」

保育者：「そうかもしれないね」

Gちゃん：「あのね、オタマジャクシかわいそうだった」

保育者は、「そうだね。だから涙が出たんだね」と、みんなにAちゃんの気持ちが伝わるように関わった。

数日後、いつものように当番がオタマジャクシの水替えをしようと外に出ると、Aちゃんが何か思いついた様子で何かを取りにいった。「そうだ！これを置いて水替えをすれば大丈夫！」とザルを持ってくる。その日の水替えはAちゃんの考え方通り、オタマジャクシが流されずに水替えができ、他の子どもからも、「A君すごい！いい考えだね！」と、声をかけられ嬉しそうにしていた。

保育者の心の声：「色水遊びの時に、草花が排水溝に流れないよう片付けの時にザルを使っていたことに気がついたんだね」



● 保育者の援助と環境

保育者は、降所時、Aちゃんの母親にその様子を伝えると、母親も嬉しそうにしていた。子どもの姿や成長を共有する場となった。園の職員にも関心が高まっていった。保育者は、生き物のコーナーに虫メガネを準備したり、カエルが掲載されている絵本や図鑑などがすぐに見ることができるよう用意したりした。

✿ 「オタマジャクシに足が出た！」（6月初旬）

一番早く登所したCちゃん。生き物コーナーを覗いていると、「ウワァ……。オタマジャクシに足が出た！」と驚いた様子。誰かに知らせたくて近くの保育者に知らせに来る。保育者は、「本当だね……！ シッポが出てきたね」と、子どもたちの発見に共感する。

その後、登所してきた友達に、次々に知らせていた。

オタマジャクシの足を見て、伸ばしたり曲げたりする様子を見ていると、

Dちゃん：「うわあ、人間みたい……」

Aちゃん：「カエルの子どもになったんだね……」

Cちゃん：シッポはどうなるんだろうね？」

Aちゃん：「えっ？ シッポだけ天国に行くんじゃない？」

Gちゃん：「えっ？ ! 違うよ！ シッポはそのままでよ！」

Bちゃん：「えっ？ ? カエルはシッポ無いよ！」

Gちゃん：「えっ……？」

Dちゃん：「目はここにあるんだねー」

水替えの時に、手に乗せては、「かわいい」と愛着をもってきた様子が見られるようになってきた。また、よく観察したり、そっと大事そうに水替えをしたりするようになった。



保育者の心の声：「毎日、自分たちでお世話をしているから、いろいろ気がつくこともたくさんあるね」

●保育カンファレンスにて



今日、おたまじゃくしに足がでたのを見てA君が「やっとカエルの子どもになったね」と言ったんです。



Aちゃんの中では、オタマジャクシとカエルが結びついてなかったのかな？ 足が出たのを見て、やっと頭の中で結びついたんだね。



シッポがどんなふうに消えるのかが興味があるようで、いろいろな考えが出てきて面白かったです。



シッポだけ天国に行っちゃうなんて、面白い考えだね……。大人では考えないかわいらしい考えだよね。でも、私も、実際どんなふうに無くなるのかよく分からなくな……。記録があると、子どもたちにも分かりやすいんじゃない？

●保育者の援助と環境

保育後のカンファレンスを踏まえ、子どもたちの興味・関心がさらに高まるよう、また、保護者にも活動の様子が伝わるよう記録を掲示する。



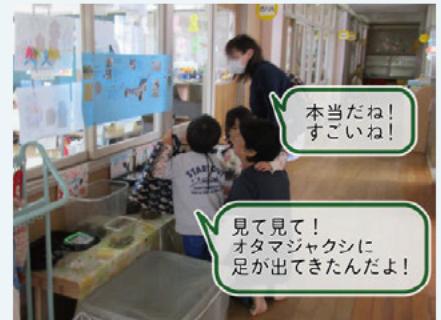
子どもたちの気づきが保護者にも伝わるよう、子どもたちの面白いつぶやきなども丁寧に聞き取りそのまま記録しておいた。「この前一緒に行った時のオタマジャクシだよね？」などと、子どもたち同士での、振り返りの場となった。

また、記録を見ながら保護者に説明することで、保護者から、気づきを受け止められたり、日頃の世話を認められたりする場ともなった。

この前一緒に行った時の
オタマジャクシだよね？

✿ 振り返り

- ・飼育スペースを作ったことで、子どもがいつでも自由に観察したり関わったりすることができ、興味も深まり、いろいろな気づきにつながったと思われる。
- ・保育カンファレンスをこまめにすることで、子どもの姿の読み取りが深まった。また、記録を職員で共通理解することで、次の手立てへつながった。
- ・記録（活動の様子が伝わるような写真や子どもの言動）を飼育の場に貼ったことで、さらに、子どもたちの興味が高まった。登所、降所時、保護者も一緒に観察をしたり、子どもの話に耳を傾けたりする姿も多く見られるようになった。



無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <https://www.sony-ef.or.jp/preschool/>」